

近世東アジア世界のなかでの日朝関係

関連するSDGsの国際目標

16 平和と公正を
すべての人に



17 パートナリシップで
目標を達成しよう



4 質の高い教育を
みんなに



人間文化学部 地域文化学科 講師 李 咳鎮
研究分野 : 東アジア国際関係史、日朝関係史

近世（江戸時代・朝鮮後期）の日朝関係について、朝鮮通信使の派遣や両国の相互認識、また仲介者であった対馬藩の動向および日朝貿易のあり方などを中心に、東アジア世界の全体像を視野に入れて研究しています。

■近世日朝交流と相互認識

豊臣秀吉による朝鮮侵略の後、近世の日朝外交は間もなく国交回復を通じて再開されました。そして17～19世紀の間、両国は朝鮮通信使の渡日などを中心に活発な文化交流も行われたため、近世は日朝関係史における平和期といえます。

同時に両国は、内面的には相手国に対する複雑な感情を抱いており、時々それが表面化することで多少の葛藤も生じたことがあります。このように、立体性を持つ近世日朝関係の構造や性格、そして文化交流の諸相とともに、両国に内面化していた相互認識のあり方などを考察しています。

■日朝関係の仲介者、対馬藩

前近代の対外関係を考える際は、ただ国家同士の関係だけでなく、そこに絡み合っていた様々な民族・地域集団の存在を見逃してはいけません。つまり、近世の日朝関係について考察する場合は、仲介者として働いていた対馬藩の動向に注目する必要があります。

しかも、対馬藩は日朝両国の間で、自己の利益を優先しつつ江戸幕府や朝鮮朝廷とはいささか異なる立場にたっていました。そのため、近世の日朝関係は対馬藩という第三の主体を挟んだ三者間の関係として把握することができます。このような対馬藩の働きかけの様相に注目することで、近世日朝関係の具体像を細かに検討しています。

■東アジア世界からみた日朝関係

対外関係史を研究する際、最も重要なのは均衡的な視覚であると考えます。日本或いは朝鮮、或いは対馬藩という一つの主体にとどまらず、各主体の立場がどのように絡み合っていたのかという全体像を展望するためです。

さらに東アジア地域、ひいては世界史的な動向の上で日朝関係史の諸相を考え直していくことも重要です。一国史的な理解を克服し、より豊富な歴史像を把握することができます。以上のことを究極的な目標として、東アジア史の中で日朝関係史を考え直しています。



上) 「正徳元年朝鮮通信使参着帰路行列図巻」(九州国立博物館所蔵)
: 1711年来日した朝鮮通信使の行列図



右) 長崎県対馬市の万松院(対馬藩主宗家の菩提寺)所蔵の三具足(朝鮮から贈られた祭具)



右) 韓国釜山市の東萊府東軒
: 朝鮮時代に対日関係の諸業務を管轄した地方官庁

<特許・共同研究等の状況>

・韓国研究財団人文韓国プラス事業(HK+) : 東国大学校文化学院「동유라시아 세계 물품의 문명문화사(東アジア世界における物品の文明・文化史)」一般共同研究員(2025.05~2027.04)